

桑原浩二の国語科（第4学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

国語科は、言語能力を育成する教科である。新学習指導要領には、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言葉の特徴や使い方などを理解し自分の思いや考えを深める学習の充実を図ること」が示されている。このような学習で、「筋道立てて考える力」を育成する。「筋道立てて考える力」とは、「書くこと」の学習において、文章の構成を考える力に該当する。

第4学年国語科「書くこと」の学習における指導事項で大切にしたいことの一つに、内容のまとまりで段落をつくったり段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることがある。なぜなら、文章を書くためには、収集した書く材料から内容のまとまりで段落をつくり、順序を考えて段落を並べるといった文章の構成の仕方を身に付けさせる必要があるからである。

本研究では、**文章化過程の往還を通して、意図をもって文章を構成する子ども**を目指す。具体的には、文章化過程の往還を通して、相手と書く言葉との関係を言葉の使い方に着目してとらえたり問い直したりするという「見方・考え方」を働かせ、文章の構成を考える力を発揮し、意図をもって文章を構成する姿である。文章化過程の往還とは、新学習指導要領において「書くこと」の指導事項で示されている「題材の設定、情報の収集、内容の検討」「構成の検討」「考えの形成、記述」「推敲」「共有」という学習過程を行きつ戻りつすることである。なお、意図をもって文章を構成するとは、「伝えたい自分の考えを伝えるために、『自分の考え』『考えの理由』『考えるきっかけになった出来事』の順番に付箋紙を並べて、文章の構成を考えました。『自分の考え』を始めにもってきた理由は、伝えたいことをすぐに伝えようと読み手に伝わると思ったからです」などと、伝えたいことに応じて段落の配列を考えることを指す。

これまでの「書くこと」の指導においても教材文の構成に気付かせ、文章の構成をとらえて書く子どもの姿を目指してきた。しかし、教材文の構成に気付いても、実際には、提示された教材文の構成に当てはめるだけで終始してしまう子どもの姿が見られた。このような子どもは、ほかの書くことの場合になると、どのような文章の構成にすればよいかという判断ができなくなるのである。

その原因は、段落の役割を理解させたり段落同士を関係付けさせたりする際に、単元で扱う教材文の構成に気付かせるだけで留まり、なぜそのような段落の配列にしたのかという構成の意図をとらえさせてこなかったことにある。

私は、子どもが「伝えたいことが相手に伝わるか」という視点を常にもち続けることが「書くこと」の授業づくりのポイントと考える。したがって、子どもが文章化過程を往還することを通して文章の構成及び文章全体を読み返し、相手と書く言葉との関係を言葉の使い方に着目してとらえたり問い直したりするという「見方・考え方」を働かせ、文章を練り上げていく学習に改善する。

2 本研究で育成する資質・能力

①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
<ul style="list-style-type: none"> ○段落の役割に関する知識・技能 ○考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など、情報と情報との関係に関する知識・技能 	<ul style="list-style-type: none"> ○内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考える力 	<ul style="list-style-type: none"> ○思いや考えを伝えようとする態度

3 主張する働き掛け

単元の導入として、「自分の考えを書いて伝えよう」という言語活動を提示する。自分の考えをもたせやすくするために、まず、1週間程度の取材期間を設定する。一人一人に付箋紙を配付しておき、考えたことを記述させておく。子どもは、この付箋紙を基に伝えたい自分の考えを仮決定する。次に、文章の構成を考えさせる。子どもは、これまでの書くことにおける学習経験から、事柄を整理するための思考ツールである構成表及びタブレット端末のアプリを活用して文章の構成を考える。しかし、子どもが考える文章の構成は、段落と段落とのつながりが曖昧であり、伝えたいことが明確に伝わる構成にはなっていない(C0)。このような子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1

グループでの勝ち抜きトーナメントの場を設定し、トーナメント後に分かったこと・考えたこと・思ったことを問う。

これは、問いをもたせ、学習課題を設定させるための働き掛けである。

文章の構成を考えさせた子どもは、草稿段階の文章を記述する。ここで、勝ち抜きトーナメント（以下、「どっちの文ショー」）の場を設定する。「どっちの文ショー」とは、互いの文章を読み比べる活動である。五人で一つのグループとなり、その中の二人が対一の勝負を展開する。その際、残りの三人が「どちらの文章が伝えたいことが相手に伝わるか」という視点で勝敗を決める。目的は優劣を決めることではなく、伝わりにくかった点などを勝敗後に伝え合い、共有することにある。子どもは、友達から評価をもらうことにより、自分の文章に対して再考したいことを見付けたりある程度の自信をもったりする。これは、**相手と書く言葉との関係を言葉の使い方に着目してとらえ**

たり問い直したりするという「見方・考え方」を働かせ始めた姿といえる。なぜなら、「伝えたいことが相手に伝わるか」という視点で自分の文章を読み返し、問い直しているからである。このような子どもに、「どっちの文ショー」を行って見て、分かったこと・考えたこと・思ったことを問う。すると、子どもは、**相手と書く言葉との関係を言葉の使い方に着目してとらえたり問い直したりする**という「見方・考え方」を働かせて、思いや考えを伝えようとする態度（③態度）を発揮し、「文章を書き直したい」「文章をよりよくしたい」と問いをもつ。その後、子どもは、「伝えたいことが相手に伝わる文章を書くためにはどうすればよいか」などと、学習課題を設定する。

働き掛け2

二つの教材文を提示し、どこをどのように再考したかを問い、自分の文章に必要な課題解決の方策を選択させる。

これは、学習課題を解決するための視点を明確にさせ、見通しをもたせるための働き掛けである。学習課題を設定した子どもに、二つの教材文を提示し、どこをどのように再考したかを問う。子どもは、**相手と書く言葉との関係を言葉の使い方に着目してとらえたり問い直したりする**という「見方・考え方」を働かせて、再取材することで必要な情報を補ったり再構成することで段落の配列を変えたりすることにより、伝えたいことが相手に伝わる文章となることに気付く（①知識・技能）。このような子どもに、自分の文章に必要な課題解決の方策を選択させる。子どもは、再取材及び再構成などの方策を講じることで、学習課題を解決できそうだと見通しをもつ。その際、再取材や再構成をするためには、構成表やタブレット端末のアプリが有効であると考え（ツール活用能力）。

働き掛け3

付箋紙をどのように並べ直すかを問い、複数の文章の構成を提案させる。

これは、必要な情報を整理させ、文章を再構成させるための働き掛けである。見通しをもった子どもに、一度並べた付箋紙をどのように並べ直すかを問う。子どもは、**相手と書く言葉との関係を言葉の使い方に着目してとらえたり問い直したりする**という「見方・考え方」を働かせて、収集した付箋紙を並べ直し、複数の文章の構成を考える（②思考力・判断力・表現力）。その後、自分が考えた複数の文章の構成をペアの友達に提案するように指示する。子どもは、なぜそのように付箋紙を並べ直して文章の構成を考えたとかを友達に説明する。このとき、伝えたいことが相手に伝わる文章の構成になっているかという視点で互いに助言し合う（協働性）。

働き掛け4

文章の構成を最終決定させ、判断した理由を問う。

これは、意図をもって文章を構成させるための働き掛けである。文章の構成を決めつつある子どもに、最終的な文章の構成を決定するように指示する。子どもは、友達の助言を基にして、自分が考えた複数の文章の構成の中から、最終的に一つを選択する。このような子どもに、文章の構成を最終的に判断した理由を問う。子どもは、「読み手にすぐ伝えるために『自分の考え』をはじめにもってきました」「読み手をひきつけて伝えるために『考えるきっかけになった出来事』をはじめにもってきました」などと、文章を構成した意図を表出する。このようにして、**文章化過程の往還を通して、意図をもって文章を構成する子ども（Cn）**になる。

働き掛け5

再度文章を記述させ、これから文章を記述していく際に考えていきたいことを問う。

これは、これまでの学習を振り返らせ、発揮した資質・能力の自覚を促すための働き掛けである。文章の構成を最終決定した子どもに、再度文章を記述させる。子どもは、最終的に決定した文章の構成で再度文章を記述する。このような子どもに、これから文章を記述していく際に考えていきたいことを問う。すると、子どもは、**相手と書く言葉との関係を言葉の使い方に着目してとらえたり問い直したりする**という「見方・考え方」を働かせて、意図をもって文章を構成すると伝えたいことが相手に伝わる文章になることを自覚する（①知識・技能②思考力・判断力・表現力③態度）。

4 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したCnになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した「見方・考え方」を働かせることができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け4を受けて、文章化過程の往還を通して、意図をもって文章を構成することができたかどうかを、子どもの発言及びつぶやき、ワークシートへの記述から検証する。
- ② 働き掛け1から、想定した「見方・考え方」を働かせていたかどうかを、子どもの発言、同意の挙手、つぶやき、ワークシートへの記述から検証する。
- ③ 働き掛け1から、想定した資質・能力を発揮していたかどうかを、子どもの発言やつぶやき、ワークシートへの記述、構成表、タブレット端末のアプリ、最終的な文章から検証する。

5 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業 (7月)「2分の1成人の主張－わたしの生活を改善しよう－」(7時間)
- (2) 中間検討会 (9月)「2分の1成人の主張－学級を改善しよう－」(7時間)
- (3) 初等教育研究会 (2月)「2分の1成人の主張－将来の夢を伝え合おう－」(7時間)